KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究：小学校外国語活動及び中学校1年生の英語学習に関わる実態調査分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 小学校外国語活動(日本型早期英語教育), 使える英語プロジェクト事業, 広域実態調査, 中学校英語教育 キーワード (En): 作成者: 松宮, 新吾 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006117

関西外国語大学 研究論集 第95号（2012年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.95 (March 2012)

早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究
（小学校外国語活動及び中学校1年生の英語学習に関わる実態調査分析）

松　宮　新　吾

要　旨

本稿では、小学校外国語活動（日本型早期英語教育）が全面実施された2011年に、大阪府教育委員会の「使える英語プロジェクト事業」の委託を受けて行った小学校外国語活動、及び、中学校１年生の英語学習に係わる広域実態調査の概要分析結果を報告する。特に、本調査研究では、小学校外国語活動が中学校英語教育に及ぼす影響や課題を特定し、大阪府における早期英語教育や小中一貫英語教育を推進するための提言を取りまとめるための根拠となる基礎データを得ることが主たる目的である。

本調査研究で実施した実態調査は、府内の児童生徒20,877人を対象としたものである。概要分析の段階では、小学生が外国語活動に対し高い満足度を示しているにも拘わらず、中学校英語に対する期待度が有意に低く現れていることや、特定の学習因子において地域差が生じ始めている可能性があることが浮かび上がってきた。

キーワード：小学校外国語活動（日本型早期英語教育）、使える英語プロジェクト事業、広域実態調査、中学校英語教育

１．はじめに

本調査研究の趣旨は、大阪府教育委員会が2011年度から取り組みを始めた「使える英語プロジェクト事業」（以下、「プロジェクト」）に関わる児童生徒の英語学習実態・意識調査の分析・考察を行う中で、大阪府の英語教育の実態と課題を明らかにすることである。これにより、小学校外国語活動（日本型早期英語教育）や小中一貫英語教育の在り方と「プロジェクト」の推進についての提言を行うとともに、当該事業の実績を検証・評価する。

なお、筆者は「プロジェクト」の運営委員として、当該事業の実施・推進、及び、事業実施成果の評価・検証に係わっている。

本稿では、今日の国の英語教育に関する動向と実態を概観した後に、大阪府における英語教育の動向と実態を、大阪府の児童生徒を対象に実施した第一次英語学習実態調査・意識調査のデータ分析に基づき考察する。なお、本稿においては、大阪府内の市町村教育委員会が所管する小学校５年生、６年生、及び、中学１年生を対象に実施した質問紙調査の概要分析の結果を

中心に論じる。

２．英語教育に関する国の動向

社会や経済のグローバル化が急速に進展する中、日本の国際競争力を高めていく英語力の向上は教育界のみならず産業界など様々な分野に共通する喫緊かつ重要な課題である。この認識のもと、文部科学省は、2010年11月に「外国語能力の向上に関する検討会」（以下、「検討会」）を設置し、生徒に求められる英語力や英語教員の質の向上、ALTやICTの活用等について、今後の施策に反映させるための議論を進めてきた。

「検討会」は、2011年６月に、これまでの審議内容をまとめた「国際共通語としての英語力向上のための５つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」（以下、「提言」）をとりまとめ公表したところである。

この報告書には、2003年に出された「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」（以下、「行動計画」）や、2009年に改訂され、2011年度から施行されている小学校学習指導要領「外国語活動編」の実績や課題等を評価しつつ、今後の英語教育、特に、初等・中等学校英語教育に関わる５つの提言と、それを実現するための具体的な施策が盛り込まれている。

「提言」では、「英語を学ぶ意欲を高める」ための創意工夫や教育環境の整備と、「使う機会の充実」を図ることにより、確かなコミュニケーション能力の育成をめざし、国際共通語としての英語力の向上を達成するという意図が示されてはいるものの、「行動計画」ほどのインパクトはなく、焼き直し版的性格を帯びたものとなっている。

「検討会」が取りまとめた５つの提言は、以下の通りである。

提言１：生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する。

提言２：生徒にグローバル社会における英語の必要性について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図る。

提言３：ALT、ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす。

提言４：英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育改善を図る。

提言５：グローバル社会に対応した大学入試となるよう改善を図る。

しかし、これらの提言とそれに付随する具体的施策の詳細を確認してみると、国が2003年に策定した「行動計画」のマイナー・チェンジ版としての性格が色濃く出ている。このことは、「検討会」がまとめた「行動計画」の達成状況の検証結果から判断しても明らかである。すなわち、「提言」では、「行動計画」の達成状況について検証を行った結果を、「一定の成果はあったものの、生徒や英語教員に求められる英語力など、必ずしも目標に十分到達していないものもあり、真

に英語が使える日本人を育成するためには、我が国の英語教育についてその課題や方策を今一度見直すことが必要である。」としている。

「一定の成果」、「必ずしも・・・十分・・・ない」、「今一度見直す」等の、日本の教育行政において多用される文言が書き並べられていることから判断しても、2009年までに英語教育の改善の目標や方向性を明らかにし、その実現のために国として取り組むべき施策を実行するためのガイドラインを示した「行動計画」は、その目標を達成することができなかったと評価せざるを得ない。

また、日本はこれまで何度英語教育を見直してきたであろうか。今回の「提言」においても、2016年までの達成を目標としていることが明記されている。このように、現状に甘んじながら、10年毎に行われている学習指導要領の改訂を待っていたのでは、加速度的に変容を遂げている今日の世界に対応することはおろか、追随することさえ困難となり、外国語教育におけるアジアの「ガラパゴス」になりかねない様相を呈している。

一方、今回取りまとめられた「提言」において評価することができるポイントは数点ある。まず第１に、具体的施策の中で示されている学習到達目標としてのCAN-DOリストの設定である。これまで一部の都道府県を除き、全国的に、学校における評価システムとして、観点別評価や指導と評価の一体化をはじめとする評価の方法論が導入され、相対評価から絶対評価へと移行されてきた。しかし、評価方法は導入されたものの、その根幹を成す評価規準が明確に示されていなかったため、大きな矛盾をはらんだままとなっていた。「提言」においては、具体的な学習到達目標をCAN-DOリストとして提示することとしている。しかし、依然として曖昧さは残されている。CAN-DOリストを設定・実践し、達成状況を把握するのは各学校単位であり、国は国として学習到達目標をCAN-DOリストの形で設定することに向けて検討を行う、としている。2016年までに５年間かけて「検討を行う」だけで日本の英語教育をグローバル・スタンダードにまで押し上げることが可能であろうか。

第２点目は、大学入試の改善に関する提言で、TOEFL等の外部検定試験の活用を推進するとしていることである。各大学学部が求める英語能力・技能の絶対的な到達目標を数値として示すことにより、小学校、中学校、高等学校と大学教育とを貫く一貫した英語教育が可能になると考える。

３．日本の英語教育の実態

「検討会」では、2003年の「行動計画」で示されたアクションプランの成果を検証している。「行動計画」では「大学を卒業したら仕事で英語が使える」という目標を設定し、中学校、高等学校の授業改善、英語教員の資質・能力向上、英語学習環境の整備・強化を提唱してきた。本稿

では、生徒の英語力、教員の資質向上、授業の改善の３点に関わる成果指標の概要を示すことで、日本の英語教育の実態を概観する。

（１）生徒の英語力について

生徒の英語力に関する指標として、実用英語検定試験（以下、英検）の合格者比率が示されている。「行動計画」では、中学校卒業時に英検３級程度の英語力を、高校卒業時には英検２級から準２級程度以上の英語力を身につけることが目標として設定されていた。

公立中学校３年生の英語力については、英検３級以上を取得した者の比率は18.3％で、同程度とみなされる生徒14.0％を含め、計32.3％とされている。

公立高等学校３年生の英語力については、英検準２級以上を取得した者の比率は10.7％。同程度とみなされる生徒19.6％を含め、計30.3％となっている。なお、同程度の根拠は明確には示されていない。（2008年度英語教育改善実施状況調査）

このデータから判断できるとおり、目標を達成することができた生徒は依然として少ない。また、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」という目標の到達度については、海外の大学への留学をめざす大学生が主として受験するTOEFL iBTのテスト・スコアにより判定を試みる。2008年度のTOEFL iBTの日本人受験者の平均点は70点（120点満点）で、全世界163カ国と地域の中で、カタール、トーゴ、クウェートと並び135位となっている。また、この成績は、韓国の81点世界80位に大きく差をつけられ、アジア30カ国中27位となっている。このような実態から判断して、『英語が使える日本人』の育成という目標は達成されなかったと結論づけることが妥当である。

（２）英語教員の英語力について

「行動計画」では英語教員に求められる英語力として英検準１級、TOEFL（PBT）550点、TOEIC730点程度以上が目標として設定されていた。これについては、中学校英語教員で英検準１級程度以上を取得した者の比率は、24.2％（2009年度公立小中学校における教育課程の編成・実施状況調査）で、高等学校英語教員で英検準１級程度以上を取得した者の比率は、48.9％（2010年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査）となっている。この数値から判断できるとおり、英語教員の英語力はグローバル・スタンダードからはほど遠く、教えるための英語力や専門職業人としての英語運用能力が十分に開発されていないことが窺える。

また、TOEFL等の検定試験や技能試験を受験したことのない英語教員の比率は、中学校で40％、高校で30％程度とされている。校務や生徒指導等に追われ自己研鑽や研修のための時間や機会すら見いだせない教員の姿が見えてくる。

（3）英語の授業の改善に関わる成果指標

英語の授業改善に関わる成果指標として、高校での英語による授業の実施率が示されている。

高校の授業における英語担当教員の英語使用状況として、普通科のオーラルコミュニケーションⅠの授業において発話のほとんどを英語で行っている教員の比率は19.6％で、発話の半分以上を英語で行っている教員の比率は、32.8％であるとされている。（2010年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査）

なお、新学習指導要領では、2013年度から高校の英語の授業は、英語で行うことを基本とするということが明記されている。

以上、「行動計画」についての成果指標の概観を通して浮かび上がってくる日本の英語教育の実態は、決して満足できるものではなく、現行の英語教育体系の中で教育を受け育成される児童・生徒の英語運用能力については、アジア諸国の現状と比較しても、さらに、厳しいものが予測される。

4．大阪府における英語教育の動向

このような実態を鑑み、大阪府教育委員会では、小・中・高等学校での英語教育を改善・推進することを目的に、「プロジェクト（小中学校版：英語を使うなにわっ子育成プログラム、以下、「なにわっ子」、高校版：English Frontier High School、以下、「フロンティア」）」を、2011年度予算で立ち上げたところである。

（1）「なにわっ子」の目的と取り組み

小中学校をターゲットにした「なにわっ子」においては、大阪府内の50の中学校区をプロジェクト推進校区として指定し、教科書内容の確実な習得と定着を図るとともに、コミュニケーションに対する積極的な態度や、自分の考えや意見を正確に伝えることができる力を育成することとしている。そのために、家庭学習習慣の定着を図るための工夫を促したり、児童生徒の自学自習力を向上させるための取り組みを推進したりするとしている。「なにわっ子」の取り組みにおいて重要な鍵となるのが、各学校での授業実施のガイドラインとなるCAN-DOリストの作成と実践である。また、本年度の取り組みにおいては、家庭での学習習慣を形成し、自律的な学習者を育成することを目的に作成・配布した音声CDの有効活用について、その成果が注目されるところである。

（2）「フロンティア」の目的と取り組み

「フロンティア」では、国際社会に通用する人材の育成と府立高校生の英語コミュニケーション能力のさらなる向上を目的に、府立高校24校を英語教育フロンティア取り組み推進校（English Frontier High Schools）として指定し、それぞれの学校や生徒の実態に応じて設定された４つの到達度レベルに基づき、英語教育推進のための実践的な取り組みを行うこととしている。

「フロンティア」の取り組みで特筆すべき事は、TOEFL iBT、TOEICのスコア、及び、英検の級だけではなく、独自のコミュニケーション・レベルを設け、取り組みレベル毎に到達すべき目標が明確に示されていることである。これにより、通常の授業実施段階においても、また、「フロンティア」への取り組み実績を検証・評価する段階においても、具体的で明確な評価指標とすることができるよう工夫されている。

５．調査研究について

本章では、「なにわっ子」で指定された大阪府内の50の中学校区で実施された英語学習実態・意識調査のデータ分析に基づき、大阪府の小学校５年生、６年生の英語教育の実態を明らかにする。

5-1．調査研究の目的

「なにわっ子」に係わる各市町村教育委員会と各学校の取り組みに関する提言や指導助言を行うとともに、事業実施効果を検証することを目的に本調査研究を実施する。そのために、実践研究校の児童生徒を対象に外国語活動や英語の授業に対する学習志向、学習態度や学習習慣、コミュニケーション特性等に関する質問紙調査を行い分析する。これにより、2011年度から全国一斉にスタートした小学校５年生、６年生における外国語活動の特性や課題を把握し、中学校での英語教育へと系統的・発展的につなぐための提言を行う。

5-2．調査研究の概要

（1）調査対象集団について

「なにわっ子」で指定された大阪府内の33市町村50の中学校区にある小学校５年生6,891名、６年生7,102名、及び、中学校１年生6,884名、合計20,877名を対象に調査を行う（第一次調査、第二次調査とも同一の調査対象集団で実施予定）。調査対象一覧を表１に示す（市町村名はあいうえお順）。

（表1:調査対象一覧）

No.	市町村名	5年生	6年生	中学1年生	計
1	池田	374	366	364	1,104
2	和泉	158	154	240	552
3	茨木	152	148	125	425
4	大阪狭山	172	174	186	532
5	貝塚	52	88	65	205
6	柏原	17	17	10	44
7	交野	191	181	194	566
8	門真	140	152	164	456
9	河南町	160	162	166	488
10	河内長野	53	78	69	200
11	岸和田	196	209	192	597
12	熊取	105	83	152	340
13	四条畷	221	211	234	666
14	吹田	113	85	58	256
15	摂津	184	177	178	539
16	泉南	258	206	208	672
17	太子町	162	173	176	511
18	大東	217	224	189	630
19	高石	192	259	176	627
20	高槻	127	114	109	350
21	千早赤阪村	49	44	43	136
22	豊中	328	411	435	1,174
23	豊能町	35	42	51	128
24	富田林	97	133	86	316
25	寝屋川	395	390	354	1,139
26	能勢町	82	65	102	249
27	阪南	79	64	64	207
28	東大阪	518	556	713	1,787
29	枚方	1,424	1,458	1,413	4,295
30	松原	154	172	135	461
31	箕面	24	43	13	80
32	守口	380	410	149	939
33	八尾	82	53	71	206
	合計	6,891	7,102	6,884	20,877

(2) 調査時期について

第一次調査：2011年７月７日（木）から８月４日（木）

第二次調査：2012年１月16日（月）から２月16日（木）

なお、調査時期については、学校行事等を配慮し、調査研究協力校の実態に応じ、柔軟に対応することとした。

(3) 調査方法について

小学校においては、外国語活動の時間、または、学活等の時間を一部活用し、担任教員の指導・監督のもと、質問紙調査実施の趣旨説明を行い、回答・記入上の注意事項を確認しな

がら、クラス単位で調査を実施し回収する。

中学校においては、英語の授業の一部で英語担当教員が、または、ホームルームの時間の一部を利用しクラス担任教員が、質問紙調査実施の趣旨説明を行った上で、回答・記入上の注意事項を確認しながら、クラス単位で調査を実施し回収する。

なお、小学校、中学校とも回答に要する時間は15分程度とし、趣旨説明や注意事項の指示等を含め、20分程度で質問紙調査を終了するよう求めた。また、質問紙調査実施の際には、児童生徒の実態に合わせ、実施担当教員がペースメーカーとして各質問項目を読み上げるなどの配慮を行うことも併せて依頼した。

各学校では、集計用のエクセル・ファイルに担当教員がデータを入力・確認し、各市町村教育委員会が取りまとめ、大阪府教育委員会（「プロジェクト」推進協議会）へ送付するよう依頼した。

調査研究協力校毎にとりまとめられたロー・データファイルを集約し、入力データの精査を行うため、外れ値検定により入力データの不備や欠損の有無を検証した。データ入力上のエラーが発見された場合には、「プロジェクト」推進協議会を通じて、各市町村教育委員会に通知をし、データの確認・訂正を求めた。

5-3. 質問紙について

第一次調査用の質問紙は、松宮（2011）が、枚方市教育特区事業における小学校英語活動の調査研究用に開発した「小学校英語活動アンケート調査」をベースに、多変量解析による分析を行うことを前提に、「なにわっ子」推進協議会が作成したものである。

作成した質問紙は、小学校５年生、６年生、及び、中学校１年生が、回答しやすくするために、４段階のプリコード法による多項選択形式の段階評価（4. あてはまる。3. どちらかといえば、あてはまる。2. どちらかといえば、あてはまらない。1. あてはまらない。）を採用した。

小学生用の質問紙では、24項目の質問を設け、外国や英語に対する興味・関心、外国語活動に関する意欲、態度、好意性や、コミュニケーションに対する態度や親和性等に対する回答を求めた。24項目中２項目はカテゴリの並びに順序のない多項選択式で単数回答を求めた（表３、表４）。

中学１年生用の質問紙では、27項目の質問を設け、英語学習の実態や外国、外国の人、コミュニケーションに対する興味、関心、意欲、態度や好意性、志向性等に対する回答を求めた。内、３項目はカテゴリの並びに順序のない多項選択式で単数回答を求めた（表５）。

小学生用質問紙では多変量解析の対象となる質問項目数は22項目、中学１年生用質問紙では23項目である。各質問項目をカテゴリ分けしたものを表２に示す。

（表2：質問項目のカテゴリ表）

質問項目のカテゴリ	小学校5、6年生用	中学校1年生用
授業（外国語活動・英語）に関する項目	4	3
英語に関する項目	4	4
外国・外国の人に関する項目	3	2
コミュニケーションに関する項目	5	6
理解学習に関する項目	4	6
英語運用能力に関する項目	2	2
計	22	23

小学校５年生と６年生に対しては、同一の質問紙を用い調査を実施することとした。外国語活動が年次移行による段階的な実施ではなく、本年度からの一斉実施により、５年生と６年生でスタートしたこと、また、５年生と６年生における発達特性や、外国語活動の学習内容等を考慮した結果、学年間における相違を設ける必要が無いと判断したためである。さらに、学年間の比較分析を行いやすくすることも目的の一つである。

中学校１年生に対しては、中学校の英語の授業特性を反映した質問紙をデザインし、調査を実施した。なお、小学生との比較分析を行うことができるよう、可能な範囲で質問項目内容を統一した。

5-4. 分析方法の概要

本年度は、小学校外国語活動が全面実施された初年度であるため、外国語活動や英語学習に対する児童生徒の意識・実態における市町村間のバラツキを検証する必要がある。統計的な有意差が生じているかどうかを検証することは、教育行政のみならず各学校や授業担当教員に対して重要な示唆を与えるものであると考える。そのために、以下に示す分析の流れに従い、学年毎にデータ処理・分析を行い、考察を加える。

(1) 基本統計量の算出による回答傾向と概要の把握

分析の対象とするデータファイルを学年毎に取りまとめ、小学校外国語活動と、中学校１年生における英語学習の実態や、児童生徒の異文化やコミュニケーション活動に対する意識等の概要を把握することを目的に、基本統計量の算出とヒストグラムの作成を行い、各質問項目に対する児童生徒の回答傾向を把握する。

(2) 因子分析によるデータの圧縮・整理

質問紙調査により得られた複数のデータを整理・圧縮し、より少ない変数で調査対象集団の特性や傾向を記述したり、比較したりするための因子を抽出することを目的に、因子分析を行う。

(3) 分散分析による市町村間の有意差の検証

固有の因子を抽出することができれば、因子毎に下位尺度得点を算出し、33の市町村別、学年別の分散分析による多重比較を行い、市町村間における統計的有意差の有無を検証する。

(4) 重回帰分析による因子間の因果関係や因果構造の探求

算出された因子得点と下位尺度得点を用い、因子相互の因果関係や因果構造を明らかにする。これにより、外国語活動や英語学習に対し有意に作用し、好ましい交互作用を生み出している要因や、ネガティブな作用を及ぼしている要因を特定し、「プロジェクト」の推進や授業改善のための提言を行う。

(5) 共分散構造分析による特定グループ間比較

因子分析により算出された因子得点をベースに、クラスタ分析を行い、それぞれ固有の特性を有するグループを特定し、グループ間の比較を行うことにより、学習者特性と学習因子との影響力の違いを明らかにする。これにより、各因子の因果関係や相互関係の有り様から、調査対象集団における因果モデルを提示し、大阪府の小学校外国語活動と中学校英語教育における実態や特性、及び、課題を明示する。

なお、本稿においては（３）分散分析までの結果と考察をとりまとめる。

６．分析結果

(1) 基本統計量による大阪府内の小学校外国語活動、中学校１年英語学習の概要

小学校５年生6,891名、小学校６年生7,102名、中学校１年生6,884名に対して実施した質問紙調査項目のうち、多変量解析を行うことを前提として採用した４段階プリコード法による質問項目のサンプル数、合計、平均値、標準偏差、及び、度数と度数比率を、表３、表４、表５に示す。

（表３：小学校５年生基本統計量）

No.	質問項目	サンプル数	合 計	平 均	標準偏差	度数分布 上段:度数 下段:比率% 4	3	2	1
1	外国に興味がある。	6889	21460	3.1151	0.9227	2869	2449	1066	505
						(41.6)	(35.5)	(15.5)	(7.3)
2	英語は好きだ。	6891	20654	2.9972	0.9448	2439	2621	1204	627
						(35.4)	(38)	(17.5)	(9.1)
3	外国語活動の授業は好きだ。	6891	22066	3.2021	0.9063	3220	2291	933	447
						(46.7)	(33.2)	(13.5)	(6.5)
4	中学校で、英語の勉強をすることが楽しみだ。	6889	17899	2.5982	1.0252	1580	2173	1924	1212
						(22.9)	(31.5)	(27.9)	(17.6)
5	将来、外国で、自分の好きな事や仕事をしたい。	6887	16326	2.3706	1.1257	1554	1450	1877	2006
						(22.6)	(21.1)	(27.3)	(29.1)
6	外国の人と英語を使って、コミュニケーションができるようになりたい。	6887	22928	3.3292	0.9062	3891	1815	738	443
						(56.5)	(26.4)	(10.7)	(6.4)
7	英語を使えるようになることは、大切だと思う。	6885	24396	3.5434	0.7294	4531	1751	416	187
						(65.8)	(25.4)	(6.0)	(2.7)
9	英語を使えるようになることは、将来、必要だと思う。	6875	24354	3.5424	0.7267	4512	1759	425	179
						(65.6)	(25.6)	(6.2)	(2.6)
11	外国語活動の授業には、積極的に参加している。	6860	20946	3.0534	0.8895	2431	2839	1115	475
						(35.4)	(41.4)	(16.3)	(6.9)
12	外国語活動の授業では、相手の話す英語をしっかりと聞いている。	6859	22735	3.3146	0.7693	3246	2727	684	202
						(47.3)	(39.8)	(10.0)	(2.9)
13	外国語活動の授業で英語を話すときは、わかりやすく話すことを心がけている。	6859	20762	3.027	0.8676	2257	2949	1234	419
						(32.9)	(43.0)	(18.0)	(6.1)
14	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生とするコミュニケーションは楽しい。	6816	22566	3.3107	0.8705	3622	2038	808	348
						(53.1)	(29.9)	(11.9)	(5.1)
15	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、学校の先生にたずねる。	6849	16661	2.4326	1.0563	1349	1896	1973	1631
						(19.7)	(27.7)	(28.8)	(23.8)
16	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、友人や家の人にたずねる。	6839	17887	2.6154	1.1412	1992	1876	1320	1651
						(29.1)	(27.4)	(19.3)	(24.1)
17	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、塾の先生や家庭教師にたずねる。	6752	10699	1.5846	0.9761	604	584	967	4597
						(8.9)	(8.6)	(14.3)	(68.1)
18	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、誰かにたずねる。	6844	20838	3.0447	1.0037	2902	2051	1186	705
						(42.4)	(30)	(17.3)	(10.3)
19	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、どうにか対応する。	6840	20316	2.9702	0.98	2448	2477	1178	737
						(35.8)	(36.2)	(17.2)	(10.8)
20	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、知っている英語を使って受け答えする。	6838	20831	3.0464	1.0153	2892	2169	979	798
						(42.3)	(31.7)	(14.3)	(11.7)
21	外国語活動の授業中に、担任の先生や友だちが使う英語の意味はわかる。	6837	20433	2.9886	0.9111	2254	2796	1242	545
						(33.0)	(40.9)	(18.2)	(8.0)
22	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生が使う英語の意味はわかる。	6806	18590	2.7314	0.9322	1509	2739	1779	779
						(22.2)	(40.2)	(26.1)	(11.4)
23	外国語活動の授業中に、先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる。	6840	17387	2.542	0.9886	1278	2366	1981	1215
						(18.7)	(34.6)	(29.0)	(17.8)
24	学校以外の場所でも、外国の人に英語を使ってあいさつや自己紹介などのやりとりができると思う。	6830	18657	2.7316	1.0467	1943	2238	1522	1127
						(28.4)	(32.8)	(22.3)	(16.5)

（表４：小学校６年生基本統計量）

No.	質問項目	サンプル数	合計	平均	標準偏差	度数分布 上段:度数 下段:比率% 4	3	2	1
1	外国に興味がある。	7099	21848	3.0776	0.964	2929	2458	1046	666
						(41.3)	(34.6)	(14.7)	(9.4)
2	英語は好きだ。	7102	20643	2.9066	0.9534	2194	2784	1391	733
						(30.9)	(39.2)	(19.6)	(10.3)
3	外国語活動の授業は好きだ。	7102	21247	2.9917	0.9434	2477	2743	1228	654
						(34.9)	(38.6)	(17.3)	(9.2)
4	中学校で、英語の勉強をすることが楽しみだ。	7101	18214	2.565	1.0148	1514	2253	2065	1269
						(21.3)	(31.7)	(29.1)	(17.9)
5	将来、外国で、自分の好きな事や仕事をしたい。	7100	15820	2.2282	1.0963	1295	1376	2083	2346
						(18.2)	(19.4)	(29.3)	(33.0)
6	外国の人と英語を使って、コミュニケーションができるようになりたい。	7097	23251	3.2762	0.9358	3809	1988	751	549
						(53.7)	(28.0)	(10.6)	(7.7)
7	英語を使えるようになることは、大切だと思う。	7094	24767	3.4913	0.7752	4488	1845	519	242
						(63.3)	(26.0)	(7.3)	(3.4)
9	英語を使えるようになることは、将来、必要だと思う。	7088	24755	3.4925	0.7676	4466	1874	521	227
						(63.0)	(26.4)	(7.4)	(3.2)
11	外国語活動の授業には、積極的に参加している。	7081	20543	2.9011	0.9002	1971	3021	1507	582
						(27.8)	(42.7)	(21.3)	(8.2)
12	外国語活動の授業では、相手の話す英語をしっかりと聞いている。	7083	22916	3.2354	0.7859	2974	3045	821	243
						(42.0)	(43.0)	(11.6)	(3.4)
13	外国語活動の授業で英語を話すときは、わかりやすく話すことを心がけている。	7083	20441	2.8859	0.8895	1881	3076	1563	563
						(26.6)	(43.4)	(22.1)	(7.9)
14	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生とするコミュニケーションは楽しい。	7071	21713	3.0707	0.9376	2797	2555	1141	578
						(39.6)	(36.1)	(16.1)	(8.2)
15	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、学校の先生にたずねる。	7066	16369	2.3166	1.0361	1142	1839	2199	1886
						(16.2)	(26.0)	(31.1)	(26.7)
16	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、友人や家の人にたずねる。	7067	17799	2.5186	1.1473	1840	1913	1386	1928
						(26.0)	(27.1)	(19.6)	(27.3)
17	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、塾の先生や家庭教師にたずねる。	7029	10783	1.5341	0.9449	579	526	965	4959
						(8.2)	(7.5)	(13.7)	(70.6)
18	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、誰かにたずねる。	7068	20676	2.9253	1.0323	2625	2186	1361	896
						(37.1)	(30.9)	(19.3)	(12.7)
19	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、どうにか対応する。	7061	20909	2.9612	0.9365	2300	2851	1246	664
						(32.6)	(40.4)	(17.6)	(9.4)
20	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、知っている英語を使って受け答えする。	7067	21177	2.9966	1.0122	2782	2305	1154	826
						(39.4)	(32.6)	(16.3)	(11.7)
21	外国語活動の授業中に、担任の先生や友だちが使う英語の意味はわかる。	7073	21018	2.9716	0.9024	2195	3069	1222	587
						(31.0)	(43.4)	(17.3)	(8.3)
22	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生が使う英語の意味はわかる。	7069	19352	2.7376	0.912	1490	2999	1815	765
						(21.1)	(42.4)	(25.7)	(10.8)
23	外国語活動の授業中に、先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる。	7071	17596	2.4885	0.9494	1087	2496	2272	1216
						(15.4)	(35.3)	(32.1)	(17.2)
24	学校以外の場所でも、外国の人に英語を使ってあいさつや自己紹介などのやりとりができると思う。	7073	18782	2.6555	1.0445	1806	2277	1737	1253
						(25.5)	(32.2)	(24.6)	(17.7)

（表５：中学１年生基本統計量）

No.	質問項目	サンプル数	合計	平均	標準偏差	度数分布 上段:度数 下段:比率% 4	3	2	1
1	外国に興味がある。	6884	20979	3.0475	0.9720	2740	2414	1047	683
						(39.8)	(35.1)	(15.2)	(9.9)
2	英語は好きだ。	6882	19604	2.8486	0.9837	2055	2562	1433	
						(29.9)	(37.2)	(20.8)	(12.1)
3	英語の授業は好きだ。	6883	19597	2.8472	0.9653	1970	2682	1440	791
						(28.6)	(39.0)	(20.9)	(11.5)
4	英語で表現できることが、増えるのは楽しみだ。	6880	19922	2.8956	0.9851	2285	2323	1541	731
						(33.2)	(33.8)	(22.4)	(10.6)
5	将来、外国で、自分の好きな事や仕事をしたい。	6879	15676	2.2788	1.1073	1356	1375	1979	2169
						(19.7)	(20.0)	(28.8)	(31.5)
6	外国の人と英語を使って、コミュニケーションができるようになりたい。	6878	21409	3.1127	0.9861	3098	2134	969	677
						(45.0)	(31.0)	(14.1)	(9.8)
7	英語を使えるようになることは、大切だと思う。	6875	23617	3.4352	0.8103	4112	1935	536	292
						(59.8)	(28.1)	(7.8)	(4.2)
9	英語を使えるようになることは、将来、必要だと思う。	6868	23524	3.4252	0.7954	4001	2038	577	252
						(58.3)	(29.7)	(8.4)	(3.7)
11	英語の授業には、積極的に参加している。	6831	20621	3.0187	0.8249	2073	3129	1313	316
						(30.3)	(45.8)	(19.2)	(4.6)
12	英語の授業では、相手の話す英語をしっかりと聞いている。	6837	21716	3.1762	0.7652	2499	3255	872	211
						(36.6)	(47.6)	(12.8)	(3.1)
13	英語の授業で英語を話すときは、わかりやすく話すことを心がけている。	6831	19451	2.8475	0.8598	1579	3135	1613	504
						(23.1)	(45.9)	(23.6)	(7.4)
14	英語の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生とするコミュニケーションは楽しい。	6637	19713	2.9702	0.9520	2288	2486	1240	623
						(34.5)	(37.5)	(18.7)	(9.4)
15	英語の授業中に分からないことがあったときには、学校の先生にたずねる。	6824	17866	2.6181	1.0361	1647	2134	1833	1210
						(24.1)	(31.3)	(26.9)	(17.7)
16	英語の授業中に分からないことがあったときには、友人や家の人にたずねる。	6818	20070	2.9437	1.0559	2617	2202	997	1002
						(38.4)	(32.3)	(14.6)	(14.7)
17	英語の授業中に分からないことがあったときには、塾の先生や家庭教師にたずねる。	6772	13830	2.0422	1.2200	1391	1015	855	3511
						(20.5)	(15.0)	(12.6)	(51.8)
18	英語の授業中に分からないことがあったときには、誰かねたずねる。	6823	22429	3.2873	0.8903	3568	2044	814	397
						(52.3)	(30.0)	(11.9)	(5.8)
19	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、どうにか対応する	6813	20110	2.9517	0.9115	2102	2851	1289	571
						(30.9)	(41.8)	(18.9)	(8.4)
20	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、知っている英語を使って受け答えする。	6836	20618	3.0161	0.9628	2524	2598	1014	700
						(36.9)	(38.0)	(14.8)	(10.2)
21	英語の授業で習った英語は、理解している。	6849	21929	3.2018	0.8086	2807	2879	901	262
						(41.0)	(42.0)	(13.2)	(3.8)
22	英語の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生が使う英語の意味はわかる。	6649	18600	2.7974	0.8978	1514	2902	1605	628
						(22.8)	(43.6)	(24.1)	(9.4)
23	英語の授業中に、先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる。	6843	17257	2.5218	0.9322	1049	2543	2181	1070
						(15.3)	(37.2)	(31.9)	(15.6)
24	学校以外の場所でも、外国の人に自分の考えや意見を英語で伝えることができると思う。	6838	14875	2.1753	0.9331	654	1719	2637	1828
						(9.6)	(25.1)	(38.6)	(26.7)

(2) 因子分析による固有因子の抽出について

各学年で探索的因子分析を行うことに先立ち、分析から除外すべき項目の有無を確認するために、項目分析を実施した。小学校５、６年生においては分析の対象となる22項目の、中学校１年生においては分析の対象となる23項目の平均値と標準偏差から、それぞれ天井効果（ceiling effect）とフロア効果（floor effect）の有無を検証した。その結果、天井効果とフロア効果を示す項目が、小学校５、６年生で４項目（項目６、７、９、17)、中学校１年生で３項目（項目７、９、17）あることが判明した。そこでこれらの項目を以降の分析から除外し、学年毎の因子分析を実施した。

小学校５、６年生の因子分析においては、18項目に対し「重みなし最小二乗法」による因子抽出を行い、「Kaiser の正規化を伴うPromax法」による回転を用い、因子の収束を図ったその結果、因子負荷量 .400を基準として解釈可能な因子解をそれぞれ５つ抽出することができた。この時の累積因子寄与率は、それぞれ59.43％（５年生)、61.71％（６年生）であった（５年生：表６・７・８、６年生：表９・10・11)。

また、各因子を構成する項目間の内的整合性をCronbachの α 係数を算出し検定した結果、小学校５年生においては .79（第Ⅰ因子）から .67（第Ⅴ因子）の値を、小学校６年生においては、.80（第Ⅰ因子）から .64（第Ⅴ因子）の値を示しており、十分な信頼性を有しているものと判断した。

小学校５年生と６年生の因子分析の結果、各因子を構成する項目が一致しており、表８と表11に示す通り、同一の因子名を採用することとした。

（表6：小学校5年生因子分析結果）

因子	No.	項目内容	因子負荷量	α
Ⅰ	12	外国語活動の授業では、相手の話す英語をしっかりと聞いている。	0.690	0.785
	14	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生とするコミュニケーションは楽しい。	0.648	
	11	外国語活動の授業には、積極的に参加している。	0.618	
	13	外国語活動の授業で英語を話すときは、わかりやすく話すことを心がけている。	0.564	
	3	外国語活動の授業は好きだ。	0.510	
Ⅱ	1	外国に興味がある。	0.665	0.732
	2	英語は好きだ。	0.640	
	4	中学校で、英語の勉強をすることが楽しみだ。	0.606	
	5	将来、外国で、自分の好きな事や仕事をしたい。	0.475	
Ⅲ	21	外国語活動の授業中に、担任の先生や友だちが使う英語の意味はわかる。	0.825	0.759
	22	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生が使う英語の意味はわかる。	0.812	
	23	外国語活動の授業中に、先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる。	0.460	
Ⅳ	18	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、どうにかして解決しようとする。	0.881	0.600
	16	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、友人や家の人にたずねる。	0.430	
	15	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、学校の先生にたずねる。	0.363	
Ⅴ	20	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、知っている英語を使って受け答える。	0.659	0.672
	19	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、どうにかして対応しようとする。	0.436	
	24	学校以外の場所でも、外国の人に英語を使ってあいさつや自己紹介などのやりとりができると思う。	0.417	

（表7：小学校5年生因子負荷量パターン行列）

因子	No.	1	2	3	4	5
Ⅰ	12	0.690	−0.140	0.077	−0.007	0.051
	14	0.648	0.059	−0.087	0.015	0.002
	11	0.618	0.026	0.015	−0.009	−0.003
	13	0.564	−0.104	0.063	0.059	0.141
	3	0.510	0.386	−0.049	0.005	−0.143
Ⅱ	1	−0.045	0.665	−0.039	−0.012	0.124
	2	0.156	0.640	0.080	−0.002	−0.069
	4	0.078	0.606	0.058	0.063	−0.025
	5	−0.150	0.475	−0.020	−0.037	0.211
Ⅲ	21	−0.034	0.010	0.825	0.014	−0.068
	22	0.004	−0.007	0.812	−0.025	−0.053
	23	0.091	0.023	0.460	0.010	0.146
Ⅳ	18	−0.091	−0.038	0.032	0.881	0.005
	16	0.115	0.042	−0.028	0.430	−0.007
	15	0.130	0.025	−0.042	0.363	0.064
Ⅴ	20	0.080	0.048	−0.059	−0.035	0.659
	19	−0.033	0.075	−0.056	0.114	0.436
	24	0.019	0.136	0.227	−0.019	0.417

（表8：小学校5年生因子一覧）

因子	因子名
Ⅰ	コミュニケーション志向因子
Ⅱ	外国・英語好意性因子
Ⅲ	理解・表現有能因子
Ⅳ	理解明確化因子
Ⅴ	インターアクション形成因子

（表9：小学校6年生因子分析結果）

因子	No.	項目内容	因子負荷量	α
Ⅰ	14	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生とするコミュニケーションは楽しい。	0.686	0.800
	11	外国語活動の授業には、積極的に参加している。	0.682	
	12	外国語活動の授業では、相手の話す英語をしっかりと聞いている。	0.665	
	3	外国語活動の授業は好きだ。	0.627	
	13	外国語活動の授業で英語を話すときは、わかりやすく話すことを心がけている。	0.543	
Ⅱ	1	外国に興味がある。	0.694	0.757
	2	英語は好きだ。	0.644	
	4	中学校で、英語の勉強をすることが楽しみだ。	0.574	
	5	将来、外国で、自分の好きな事や仕事をしたい。	0.548	
Ⅲ	21	外国語活動の授業中に、担任の先生や友だちが使う英語の意味はわかる。	0.869	0.771
	22	外国語活動の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生が使う英語の意味はわかる。	0.809	
	23	外国語活動の授業中に、先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる。	0.459	
Ⅳ	18	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、どうにかして解決しようとする。	0.762	0.645
	16	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、友人や家の人にたずねる。	0.616	
	15	外国語活動の授業中に分からないことがあったときには、学校の先生にたずねる。	0.423	
Ⅴ	20	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、知っている英語を使って受け答えする。	0.674	0.643
	19	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、どうにか対応しようとする。	0.558	
	24	学校以外の場所でも、外国の人に英語を使ってあいさつや自己紹介などのやりとりができると思う。	0.379	

（表10：小学校6年生因子負荷量パターン行列）

因子	No.	1	2	3	4	5
Ⅰ	14	0.686	0.016	−0.063	0.016	0.014
	11	0.682	−0.070	0.035	−0.035	0.024
	12	0.665	−0.190	0.124	0.054	0.060
	3	0.627	0.383	−0.098	−0.055	−0.103
	13	0.543	−0.099	0.090	0.092	0.119
Ⅱ	1	−0.087	0.694	0.015	0.021	0.069
	2	0.248	0.644	0.050	−0.027	−0.066
	4	0.155	0.574	0.032	0.045	−0.018
	5	−0.215	0.548	0.010	0.043	0.125
Ⅲ	21	−0.033	0.030	0.869	−0.016	−0.076
	22	0.043	0.000	0.809	−0.028	−0.100
	23	0.073	0.030	0.459	0.041	0.149
Ⅳ	18	−0.058	0.001	0.022	0.762	−0.008
	16	0.020	0.068	−0.045	0.616	−0.035
	15	0.145	0.019	−0.020	0.423	0.001
Ⅴ	20	0.068	0.067	−0.046	−0.060	0.674
	19	0.025	0.034	−0.104	0.018	0.558
	24	−0.010	0.150	0.263	−0.006	0.379

（表11：小学校6年生因子一覧）

因子	因子名
Ⅰ	コミュニケーション志向因子
Ⅱ	外国・英語好意性因子
Ⅲ	理解・表現有能因子
Ⅳ	理解明確化因子
Ⅴ	インターアクション形成因子

中学校１年生の因子分析においては、対象となる20項目に対し「主成分分析法」による因子抽出を行い、「Kaiser の正規化を伴うPromax法」による回転を用い、因子の収束を図った。その結果、因子負荷量 .400を基準として解釈可能な因子を５因子解抽出することができた。この時の累積因子寄与率は、60.19％であった。（表12、13、14）

また、各因子を構成する項目間の内的整合性をCronbachの α 係数により検定した結果、.85（第Ⅰ因子）から .55（第Ⅴ因子）の値を示しており、十分な信頼性を有しているものと判断した。

中学校１年生を対象とした因子分析の結果、各因子を構成する質問項目の内容と特性から、表14に示す因子名を採用することとした。

（表12：中学校1年生因子分析結果）

因子	No.	項目内容	因子負荷量	α
Ⅰ	3	英語の授業は好きだ。	0.9280	0.854
	11	英語の授業には、積極的に参加している。	0.7420	
	2	英語は好きだ。	0.7020	
	14	英語の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生とするコミュニケーションは楽しい。	0.6790	
	12	英語の授業では、相手の話す英語をしっかりと聞いている。	0.6330	
	4	英語で表現できることが、増えるのは楽しみだ。	0.6070	
	13	英語の授業で英語を話すときは、わかりやすく話すことを心がけている。	0.4490	
Ⅱ	23	英語の授業中に、先生や友だちに英語を使って自分の考えを伝えることができる。	0.8200	0.778
	22	英語の授業中に、外国人指導助手や英語教育支援員の先生が使う英語の意味はわかる。	0.7570	
	24	学校以外の場所でも、外国の人に自分の考えや意見を英語で伝えることができると思う。	0.7560	
	21	英語の授業で習った英語は、理解している。	0.6500	
Ⅲ	5	将来、外国で、自分の好きな事や仕事をしたい。	0.8650	0.714
	1	外国に興味がある。	0.7460	
	6	外国の人と英語を使って、コミュニケーションができるようになりたい。	0.6250	
Ⅳ	16	英語の授業中に分からないことがあったときには、友人や家の人にたずねる。	0.7920	0.584
	18	英語の授業中に分からないことがあったときには、どうにか解決しようとする。	0.7770	
	15	英語の授業中に分からないことがあったときには、学校の先生にたずねる。	0.5640	
Ⅴ	19	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、どうにか対応する。	0.9430	0.547
	20	学校以外の場所で外国の人が英語で話しかけてきたら、知っている英語を使って受け答えする。	0.6630	

（表13：中学校1年生因子負荷量パターン行列）

因子	No.	1	2	3	4	5
Ⅰ	3	0.9280	−0.1040	0.0240	−0.1280	−0.0040
	11	0.7420	0.0500	−0.1750	0.1030	−0.0720
	2	0.7020	0.0880	0.1680	−0.1510	0.0190
	14	0.6790	−0.1100	0.0690	0.0390	0.0730
	12	0.6330	0.1500	−0.1950	0.1650	−0.0150
	4	0.6070	−0.0250	0.2920	−0.0260	0.0340
	13	0.4490	0.2520	−0.0390	0.1420	−0.0130
Ⅱ	23	−0.0600	0.8200	0.0800	0.0460	−0.0570
	22	0.0580	0.7570	0.0090	−0.0550	−0.0450
	24	−0.1470	0.7560	0.1300	−0.0440	0.1630
	21	0.2730	0.6500	−0.1120	−0.0390	−0.0510
Ⅲ	5	−0.1930	0.1100	0.8650	0.0420	−0.1060
	1	0.0760	0.0220	0.7460	0.0290	−0.0140
	6	0.2440	−0.0760	0.6250	0.0540	0.0940
Ⅳ	16	−0.0150	−0.0990	0.1480	0.7920	−0.0950
	18	−0.1070	0.0400	−0.0270	0.7770	0.1430
	15	0.2210	−0.0030	−0.0110	0.5640	−0.0310
Ⅴ	19	−0.0230	−0.0910	−0.0710	0.0010	0.9430
	20	0.0540	0.1620	0.0110	0.0230	0.6630

（表14：中学校1年生因子一覧）

因子	因子名
Ⅰ	英語・コミュニケーション志向因子
Ⅱ	英語理解表現自己有能因子
Ⅲ	異文化志向因子
Ⅳ	理解明確化因子
Ⅴ	インターアクション形成因子

(3) 分散分析による地域間の有意差について

市町村間の有意差を検証するために、各因子を構成する項目の平均値を算出したものを下位尺度得点として用い、一元配置分散分析により、市町村間の有意差を算出する。そのために、大阪府内を東西南北の４つのブロックに分け、各ブロックを代表する市町村で、被験者数が150名程度のほぼ同数の４市を抽出し、下位得点毎の一元配置分散分析とそれに基づくFisherの最小有意差法による多重比較検定を行った。本稿では、外国語活動を開始したばかりの小学校５年生において有意差が生じているかということを検証する。

その結果、第Ⅲ因子「理解・表現有能因子」と第Ⅴ因子「インターアクション形成因子」においてそれぞれ１％水準での有意差が確認された。分散分析表と多重比較検定の結果を表15、16、17、18に示す（抽出した市町村についてはA、B、C、Dで表記してある）。なお、第Ⅰ因子「コミュニケーション志向因子」、第Ⅱ因子「外国・英語好意性因子」、第Ⅳ因子「理解明確化因子」においては、有意差が確認できなかった。

（表15：理解・表現有能因子による分散分析結果）

因　子	平方和	自由度	平均平方	F　値	P　値	判　定
有能因子	20.4091	3	6.8030	10.3632	0.0000	**
誤差	370.2419	564	0.6565			
全体	390.6510	567				

**:1%有意 *:5%有意

（表16：Fisherの最小有意差法による多重比較検定結果　理解・表現有能因子）

水準1	水準2	平均1	平均2	差	統計量	P　値	判　定
A	B	2.8280	2.8378	0.0098	0.0999	0.9205	
A	C	2.8280	2.4857	0.3422	3.4253	0.0007	**
A	D	2.8280	3.0022	0.1742	1.7820	0.0753	
B	C	2.8378	2.4857	0.3521	3.6977	0.0002	**
B	D	2.8378	3.0022	0.1644	1.7686	0.0775	
C	D	2.4857	3.0022	0.5165	5.4585	0.0000	**

**:1%有意 *:5%有意

（表17：インターアクション形成因子による分散分析結果）

因　子	平方和	自由度	平均平方	F　値	P　値	判　定
インタラクション	12.1589	3	4.0530	6.8723	0.0001	**
誤差	346.1856	587	0.5898			
全体	358.3444	590				

**:1%有意 *:5%有意

（表18：Fisherの最小有意差法による多重比較検定結果　インターアクション形成因子）

水準1	水準2	平均1	平均2	差	統計量	P　値	判　定
A	B	3.0390	2.9843	0.0546	0.6190	0.5362	
A	C	3.0390	2.7202	0.3188	3.5344	0.0004	**
A	D	3.0390	2.7351	0.3039	3.4549	0.0006	**
B	C	2.9843	2.7202	0.2641	2.9059	0.0038	**
B	D	2.9843	2.7351	0.2492	2.8106	0.0051	**
C	D	2.7202	2.7351	0.0149	0.1645	0.8694	

**:1%有意 *:5%有意

7．考察と課題

本稿では、基本統計量、因子分析、分散分析までの結果に基づき、大阪府における小学校外国語活動、及び、中学１年生における英語学習について考察を行う中で、取り組むべき課題等を提示する。

(1) 外国語活動の授業に対する好意性と中学校英語に対する期待度のギャップ

小学校５、６年生の基本統計量から、児童の英語及び外国語活動に対する好意性（「英語が好きだ。」「外国語活動の授業は好きだ。」で「どちらかといえば、あてはまる」「あてはまる」の肯定回答比率）が高くなっている（５年生：73.4％、79.9％、６年生：70.1％、73.5％）ものの、中学校の英語に対する期待度（「中学校で英語の勉強をすることが楽しみ」）が有意に低くなっている（５年生：54.4％％、６年生：53.0％）。このことは、小中一貫英語教育を推進する上で、教育行政的にも、各学校での授業実践レベルにおいても、喫緊に検討すべき取り組み課題となる。

(2) 英語に対する好意性と授業内容の明確化に対する消極的態度の現れ

基本統計量の分析から、大阪府内の中学校１年生の英語についての好意性を示す指標として、「英語が好きだ」に対する「好きである」「どちらかと言えば好きである」を合わせた肯定回答は67.1％、また、「英語の授業は好き」に対する肯定回答は67.6％であった。次に、英語の授業の理解度について、本調査における大阪府内の中学１年生においては、「どちらかと言えば理解できていない」と「理解できていない」の否定回答比率は17.0％となっている。

これらの結果を評価するための対照となる適切な指標は見あたらない。国が実施した同様の調査で最新のものは、2004年度小中学校教育課程実施状況調査によるものであるため、厳密な比較を行うことができないものの、参考までに全国の中学１年生に対する調査結果を示す。2004年度の全国調査によると、「英語の授業が好きか」に対して、「好きである」「どちらかと言えば好きである」を合わせた肯定回答比率は、60.5％であった。また、「英語の授業がどの程度わかるか」に対しては、「わからないことが多い」と「ほとんどわからない」の否定回答比率が20.5％であった。この参考データから判断して、本調査による大阪府内の中学１年生の英語学習に対する好意性や理解度は、ほぼ全国レベルに達していると評価してもよいと考える。

一方、授業内容の理解を明確化することに関わる質問項目（「先生にたずねる」）については、小学校５、６年生での肯定回答比率はそれぞれ47.4％、42.2％で、否定回答比率のほうが上回っていることが、また、中学１年生では肯定回答比率が55.4％で、それほど高くなっていないことが判明した。理解の明確化は、児童生徒の学習不安要因や担当教員とのインターアクションの在り方や人間関係とも密接に関連するもので、クラスタ分析以降の考察により、他の要因との関連性を追究する必要がある。

(3) 共通因子解の出現と因果関係の究明

小学校５、６年生、及び、中学１年生において共通因子解として、コミュニケーション志向因子、表現活動や理解学習に関する自己有能因子、理解明確化因子とインターアクション形成因子を特定することができた。今後の分析において注目に値するのが、自己有能因子と他の因子との交互作用や直接・間接効果等の因果関係を解明することである。特に、基本統計量の分析から明らかになった理解明確化関連項目の平均値が低くなっていることが、どのような影響を及ぼしているのかについての分析が待たれるところである。

(4) 特定因子の地域間における有意差の問題

本稿では５年生のみではあるが、分散分析の結果、第Ⅲ因子「理解・表現有能因子」と第Ⅴ因子「インターアクション形成因子」においてそれぞれ１％水準での有意差が確認され、地域による相違が一部生じ始めている可能性があることが確認できた。特に、第Ⅲ因子は自己有能感に、第Ⅴ因子は態度要因に関わる因子で、コミュニケーション能力の育成と密接に結びつくものであることを考慮すると、各市町村が独自に実施している教員研修や教材開発研究等について、大阪府の教育行政レベルで体系的に取り組まなければならない課題であると考える。

本稿においては、「プロジェクト」による調査結果の概要をまとめ、以降の分析のガイドラインを示すとともに、大阪府の小学校外国語活動と中学１年生の英語学習に係わる課題を提示した。今後は、抽出した因子や下位尺度得点に基づき調査対象集団をクラスタに分類し、それぞれのクラスタ特性と因子特性とを掛け合わせながら分析を進める中で、各要因の因果関係や相互関係等を明らかにする。これにより、「プロジェクト」の推進を図るとともに、大阪府の英語教育改善に係わる提言をとりまとめる。

参考文献

国立教育政策研究所（2004）「平成15年度小中学校教育課程実施状況調査」

松宮新吾（2011）「早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究（第四次調査）」関西外国語大学『研究論集』 94：99-115.

文部科学省（2007）「平成19年度英語教育改善実施状況調査」

文部科学省（2009）「平成21年度公立小中学校における教育課程の編成・実施状況調査」

文部科学省（2010）「平成22年度公立高等学における教育課程の編成・実施状況調査」

文部科学省（2011）「国際共通語としての英語力向上のための５つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」 外国語能力の向上に関する検討会

（まつみや・しんご　英語キャリア学部教授）